慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	并逢と協脅と：古代シナのいわゆる「怪力乱神」に関する一研究
Sub Title	Ping-feng (并逢) and Hsieh-lu (協脅) : a study on the Monstrous Goods in Ancient China
Author	伊藤, 清司(Ito, Seiji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1963
Jtitle	史学 Vol.36, No.4 (1963. 12) ,p.33(453)- 72(492)
JaLC DOI	
Abstract	The following is the passage we find in "T'ien wen (天問)", a chapter of the Ch'u tz'u (楚辞): "It is said that Ping hao (〓号) causes the rain to fall. Why should it do so? And it is said that two deer are united in a body with their sides of chest combined. Why should the sacred deer, Hsieh lu (脅鹿), have taken such a shape?" Probably the word "Ping hao (〓号)" bears the same meaning as the words "ping feng (〓封)", "pieh feng (龜封)", and "p'ing feng (平逢)" which are found in the Shan hai ching (山海経), the I chou shu (逸周書), and other books; and I admit Professor Wen i to's (聞一多) explanation that these words originarlly meant the copulation of male and female, or the sexual union. [Cf. "伏養考" by Prof. Wen i to (聞一多)] As to its shape, the Shan hai ching (山海経), the I chou shu (逸周書) and so on, have explained that such an animal as "Ping feng (〓封)" or "Ping feng (平逢)" has a head respectively in the front part and in the rear one of its body, or on both sides of it. The figure of the sacred animal in such a monstrous shape can be not only found in ancient books, but known by the stone bas-leliefs and the earthen ming-chi (明器) which were ready for the life beyond the grave. Some examples are here in Fig. 8 ~ 15 and 17. (The sculptures in Fig. 8 ~ 10 have been dug out from some tomb built in Ssu ch'uan (四川) Province in the Han (漢) period, Fig. 11 from some tomb in same province in the Wu tai (五代) period, Fig. 12 ~ 14 from some tombs in Shan hsi (山西) province in the T'ang (唐) period, Fig. 15 from some tomb in Hu nan (湖南) province in the T'ang period, and Fig. 17 from some tomb in Shan hsi (陝西) province in the Han (漢) period.) In the Hou han chu (後漢書), the Hua yang kou chih (華陽国志) and so on, there are also many descriptions of the sacred deer which has a head respectively at the front top and at the rear one of its own, or at the right top and in the left one of them. I think that this suggests the sexual union of two deer as well. So "the two deer, united in a body with their sides of chest combined "Hsieh lu (脅鹿)," which have been related in the T'ing wen (天問) may be suppossed to he much the same as the sacred deer which have appeared in the Hou han chu (後漢書) and so on; for, according to Wang's (王逸) comment, "the two deer united in a body with their sides of chest combined" are equal to "the sacred deer which has a body with two heads and eight limbs." The very sculpture in Fig. 1, which has been dug out from some tomb constructed in the land of Ch'u (楚) in Chan kuo (戦国) period, is undoubtedly the same as the Hsieh lu (脅鹿) in the T'ieh wan (天問). In the land of Ch'u (楚), more sculptures of various animals, each of which has a body with two heads, have been found out. I suppose that, in ancient times, the sacred figures in such a strange shape had been the object of popular belief, especially in the land of Ch'u (楚) in Chan kuo (戦国) period, It is,h owever, doubtful whether such mysterious gods originated in Chan kuo (戦国) period. I suspect that they had originated in older times. The marble sculptures in Fig. 28, 29, which have been dug out from a tomb of the Shang (商) Dynasty, may be supposed to express the sacred animal which has a body with two heads as well. Moreover, the sculpture in Fig. 30, which has been also found out in a tomb of Shan (商) Dynasty, may be assumed to express the copulation of Hu-hsi (伏義) and Nii-wa (女〓) as well as the sculpture in Han (漢) period which is shown in Fig. 7.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19631200-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

并逢と協脅と

――古代シナのいわゆる「怪力乱神」に関する一研究――

伊藤清司

一

「楚辞」の一篇「天問」成立の動機については、讒言のため主君の懐王に追放された屈原が、山沢彷徨の間、たまたま、楚の先王の廟壁に描かれてある天地・山川・神霊、あるいは古の聖人賢者から怪物などにいたるさまざまの図をみて、其の傍に画賛の詩を書いたものを、のち、楚人が編纂したものであるとも伝えられ、またそのような題壁の句の集成ではなくて、屈原の自作自編、天を仰いで問うて作つた疑義の文学であるともいわれるが、いづれにしても当時行われていた宇宙や歴史に関するさま〴〵な不思議な伝承について問呵したものであることは事実である。(1) この「天問」の中ほどに、つぎのような怪奇な伝説に対して発した疑問の一節がある。

萍号起レ雨　何以興レ之
撰ニ体協脅一　鹿何膺レ之

さて、この四言四句の前半の二句について、王逸は

蓊とは**蓊**翳のことで、雨師の名である。号とは呼ぶことであり、興は起こすことである。雨師が号呼すれば、雲が起こり、雨がふる。というが、どうして**蓊**翳が雨をふらすのだろうか？

と注釈をし、また後半の句については、まず、「膺とは受けることである。」といゝ、さらに「協脅の体をもつ」という

その不可思議な鹿について

天は十二神鹿を撰える。(2) それは一身で、しかも足が八本、二つの頭の鹿だというが、どうしてこんな形体をうけそなえたのだろうか？

と訓解している。

ところで、王逸が書きとゞめたこの「神鹿」についての説明は、のち〳〵までも踏襲されて、朱子本などにも採用されているのだが、一身にして両頭八脚などというおよそ荒唐無稽というほかない奇妙な姿をしていたその神鹿について、東漢のころに、何かこれを裏づけるような伝説なり古訓なりがあつて、それが採り上げられて王逸の注釈となったように推測されないこともないが、清の蔣驥も困惑して

旧訓は天が十二神鹿を撰うといつているが、なにに拠つたのか詳かでない。(3)

と嘆いたとおり、その根拠、出所については残念ながら確認することができない。しかし、神鹿についてのさきの描写が王逸の勝手な湼造や根も葉もない空想の所産であつたとはとうてい考えられないのであつて、この点はこの小論の中途にいたらぬうちに、しだいに明らかにされてゆくものと思う。

二

さて、王逸本の

撰体協脅

の一句中の協の文字は合わせるという意味であり、一方、脅は『説文』にも「両膀なり」といっているように、腋の下、わき腹のことであるが、このような字義の上から考えても、問題の神鹿は脇腹の部分で体軀を併わせあったような怪異な容姿をしていたのではないかと想像されるのであるが、仮りに二とうの鹿が脇腹のところで互いに体を接合しあったとすれば、それは王逸の表現したように、一瞥して一身二首八足とみなされて、いっこうに不思議ではないのである。もつとも「天問」のさきの句にある脅と協の訓解について、多少の異説を唱える先学もないわけではないが、大抵は異工をもつてしながら、結局は同曲を調でるといったたぐいのものばかりであり、たとえば清の王邦采もまたその一人である。彼は王逸のいうように、協の字を合わすとは訓じないで、協・脅とも同義異形の二つの文字が、誤つて重複したものであろうとみているのであるが、(4) 実は、すでに朱熹のテキストが、この部分を

撰体脅鹿　　何以膺之

としているのは、おそらく王邦采と同じような見解に立つて本文を正したものであろう。この朱熹本の方は、その末句「何以膺之」が、前の句の「何以興之」と対文をなしているほか、これに続くつぎの章の

鼇戴山抃　　何以安之

釈舟陵行　　何以遷之

とも揃い、また「天問」一篇百七十二箇のなぞかけの疑問文中「名詞何動詞之」の形式は他に例がなく、問呵の多くが「何以動詞之」の形をとっている点からも、朱子のテキストがより合理的であり、王邦采の指摘の棄て難いもののあることが感じられる。

しかし、王逸本の「協脅」を「脅鹿」とするにしろ、これについての朱熹の解釈は、さきにも触れたように、王注をそのまゝ踏襲して変わるところがないのである。朱熹は「天問」のこの一章について

大抵、荒誕で説がないので、今まだ論じない。(5)

といって、更に多くを語ろうとはしていないのであるが、彼が古注を採って、そのまゝ自分のテキストに用いた事由も、実はその余りな荒唐さにあったに相違ない。

とにかく、協の文字を衍字とみるか否かの違いはあるにしても、王逸の「脅（脇）を協わせた体を撰った鹿」も、朱熹の「脅鹿」も、所詮は同様に、一身両頭に八本の足をもった神鹿と解釈しているわけであるが、そも〳〵このような荒誕無稽な神獣がどうして創造されていったのであり、またこの怪奇な姿態はなにを表わしたものであろうか？　屈原ならずとも誰もが懐だく当然の疑問であろう。以下にこれについて卑見を述べてゆくわけであるが、そのために「天問」の中の問題としている章の最初の句にたちもどり、まづ「**漭**号」の意味について考えてゆきたい。というのは「協脅の鹿」ないし「脅鹿」と「**漭**号」とは互いに関連があり、これらの解明の上に彼此相補いあう形態と意味とをもつているものと考えられるからである。

漭号の号の字は、はじめにのべたように、王逸以来「呼号」の意味だとされ、後世の訓詁の多くはこれに従つてきた

が、蔣驥はこれにも異疑を唱えて、

旧訓が号を呼ぶとするのは誤り[6]

だとし、その理由について、

『搜神記』に、雨師は一に屏翳といゝ、また一に号屏ともいつており、『郁離子』は**滂**号が雨（あめふること）を行うといつている。これらを按ずれば、則ち**滂**、号ともに雨師の名である[7]

と論じて、号と**滂**とは同義で、「**滂**号」と熟語として訓読すべきだと主張した。果して号の文字に本来そのような意味があるのかどうかについて、蔣驥はたしかな根拠を示していないし、これを今にわかい確認することもできないので、彼の主張に徒らに盲従すべきではないかもしれない。しかも、**滂**号の用字例は寡聞にしてほかに識らないのであるが、しかし、『漢書』「郊祀志」上の顔師古の注では「雨師は屏翳であり、一に屏号という」とあるほか、号屏の語が『搜神記』にあり、また晋の張景陽の詩の中にも「豊隆が号屏を迎える」と詠われているのをみれば、確証とするには決して十分な例示ではないが、**滂**・屏が号と熟して名詞となる用例は全くなかつたとは考え難いものがあつて、蔣驥の主張は一概に看過できない見解のように思われるのである。

三

ところで、**滂**翳ともいゝ**滂**号ともいわれるその雨の神なる存在は、一体どういう形の神であつたろうか？『山海経』の「大荒南経」に

三青獣の相**并**するものがあり、名ずけて雙雙という。

の一節がある。

相**并**するというのは体を合せて一つになることをいう。

と説くのが、これに対する郭璞の注釈であるが、いうまでもなく、**并**は並と同音同義の文字で、並らべる、あわせるなどの意味をもつ文字である。

同じ『山海経』の「海外西経」には

并封は巫咸の東にある。其の状は**彘**ようであつて、その前後にはともに首がある。

とあつて、この**并**の文字が封と熟語をなしており、しかも興味深いことは、これが体の前後に二つの首をもつ奇獣に対する称呼であつたことが知られるのである。同じような例が「大荒西経」中にもみられる。

山があり、鏖鏊鉅という。これは日月の入るところであつて、そこに獣がおつて、左右に首をもつており、名づけて屏蓬という。

前後、左右という表現の違いはあつても、この屏蓬もまた「海外西経」の**并**封と同じく一身二首の奇獣であることはほゞ間違いなく、**并**と屏、封と蓬がそれ〴〵同音であることによつても、両者が同類のものをさした称呼であることが容易に想像つく。さらにつぎの鼈封や平逢もまた同じような怪獣をさしたものであろう。『逸周書』の「王会解」に

鼈封は**彘**のようで、前後に首がある。

といつているこの鼈封とは鼈、**并**転声であつて、その形容も「海外西経」にいう一身二首の**并**封と何ら変るところがない。また、「中山経」に

平逢の山……神がある。其の状は人のようでしかも二首があり、名ずけて驕蟲という。

とある。その奇神の名の驕蟲は未詳であるが、平逢は并封と音が通じ、この山名はそこに棲むと伝承されている怪神が一身二頭の姿をしていたことに由来したものであることは、誰もが認めてくれるだろう。

ところで、その并封といい并逢ともいわれる神怪は一体どんな種類の禽獣であろうか？　それはもちろん単一の実在の鳥獣ではなくて、多分に空想化された存在であろうが、その主体をなしているのはどういう禽鳥蟲獣であつたろうか？この点に関して何らかの説明をしているのは『逸周書』や「海外西経」で、彘に似たものといゝ、「大荒西経」は獣のたぐいと記述している。しかし一方、「中山経」には、人間の状をして、しかも驕蟲の名でよばれる螫蟲の類であるともいゝ、はなはだ不可解である。他に恰好な資料もないので、以上のかぎられた文献からだけではこれがどんな種類の動物に基いて空想化されたものなのか、沓としてつかみ難いのであるが、同一の書中で、あるいは獣のたぐいだといい、毒蟲の一種だといつて、その表現が一定してないのは、実在ではなくてあくまでも神話的空想的所産であつたがためでもあろうが、実は并封・并蓬というのは本来二つのものの併合・逢着する有様を描写した言葉であつて、最初は必しも結合した特定の存在をさした固有名詞ではなかつたのではなかろうか？　并逢の逢は『説文』にも「遇う」こととある点などを勘案すると、逢・蓬・封の文字は結局、并・蓱・屏・平などの語と同様に、相並んで結合しあうことを表現したものであつて、并封・并蓬・平逢などの一連の言葉は、いわば雙声の語であつたのではないかと推論されるのである。とするるならば、さきに問題にした「天問」にいう蓱号の文字もまた同じように考えてみることはできないだろうか？

つぎに、王逸が注記し、また西漢司馬相如の『大人賦』や三国魏の曹植の『洛神賦』その他に散見する**蓱**翳とは一体何であるかについて述べなければならないが、実は晋の虞喜も嘆息して「屏翳を説く者多しといえども、**并**びに拠るところを明らかにするもの多からず」（虞喜志林）といつているように、私にも目下とくに披歴できる卑見もないけれども、強いていえば、翳は理想上の霊鳥の名称ではないかと考える。『山海経』の「海内経」に

蛇山に五彩の鳥がおり……名づけて翳鳥という。

といゝ、その郭璞の注にはこの翳鳥とは鳳鳥の属であるとのべ、『玉篇』にもまた

翳は鳥の名で、鳳に似ている。

とあるほか、『漢書』の「司馬相如伝」にも、鳳皇と並んで翳鳥の文字がみえている。このように翳または翳鳥は瑞鳥である鳳凰と並らび称せられる理想上の神鳥であつて、おそらくは**鷖**とも通じて使用されうる文字であつた。現に『楚辞』「離騒」の

玉虯を駟として、**鷖**に乗る

の**鷖**は、王注に、さきにあげた「海内経」をひいて体紋からみても鳳凰のたぐいであろうといわれ、また『史記』「司馬相如伝」張揖注・『文選』・『後漢書』の注など、この「海内経」のこの条を引用するものは翳鳥を翳鳥に作つている。

もつとも「離騒」中に、翳を蔽うの意味で使用している文があり、上にひいた「海内経」は、翳鳥は日を蔽うといゝ、五色の鳥が一郷を飛蔽するために翳鳥と名づけるといつた文章もあるなど、翳を掩覆という意味で使用した例が少

なくないから、**蓱翳**の翳を瑞鳥の名とするには、疑問もないわけではなく、また、**蓱**あるいは**并**のたぐいの字と禽獣名とを結んで使つた称呼がほかに存在することをしらないから、以下は一つの推測の域をでないが、**蓱翳**とは**并**逢した**鷖**鳥――つまり、あとで言及するつもりだが、「公羊伝」の疏にみえる「一身でしかも二つの首をもつという雙雙の鳥」のような不思議な姿の神鳥にあたえられた呼称ではなかつたろうかとも考えられるのである。しかし屈原が詠じた**蓱**の一字に、王逸が注したように果して**蓱翳**の意を求めうるかどうかは実は甚だ疑わしいものがある。

とにかく以上のように「天問」の**蓱**号起雨、何以興之の句はどちらにしろ雨神に関する問呵であることには変りはないが、その**蓱**号を**并**逢・**并**封の類とみなすべきなのか、それとも王注などのように**蓱翳**が号呼すると訓読すべきなのかは、今のところ決定しかねる。この黒白は早晩、新資料の獲られるにつれて、おそらく明白にされるに相違ないと考えるが、明晳さを欠くうらみがあるとしても、しばらく両者の仮説をたばさみながら、つぎの問題に進んでゆきたい。

さて、「天問」中の**蓱**号（翳）と脅鹿とについて、一つはその字義を中心に、他は古来の注訓を手がかりとして、大ざつぱな考察を進めてきたのであるが、あらかじめいつたようにいずれも一身二首という奇妙な姿をもつた神怪をさしていると考えられる点があり、この一章こそは、屈原が王廟の壁画中の**并**逢し、協脅した神異の絵を実際にみながら、疑問を発したのか、あるいは当時伝承されていたこの同じような神話・伝説を一つのテーマにまとめ、それを問呵したものではなかつたかと想定されるのである。

このような推論は、問題にしているこの章が、つぎのような問呵につゞいて述べられている点を考慮に入れるなら

ば、さらに少しく可能性がますのではなかろうか。

天式は従横にして、陽が離れれば爰に死す。

大鳥は何ぞ鳴くか、それ、焉ぞ厥の体を喪うのか。

この章の前半では、まづ陰陽の交合が説かれ、陽気が離脱することは、死を意味するという天の理法が述べられており、そして、後半は、かつて丁晏がいつているように[8]『山海経』にみえるような鼓と欽鴟の説話（「西山経」）について疑問を抱いたものと考えられるのである。「西山経」の中のその説話というのは――

鍾山の神の子を鼓といつた。その状は人面にして竜身で、かれは欽鴟とともに昆侖の陽で葆江を殺した。帝はそこでこれらを鍾山の東の猨崖というところで戮した。欽鴟は化して大鶚となり……鼓もまた化して鵕鳥となつた……

というのであるが、この章は、陰陽の結合＝生と、その離散＝死を問題にした前半につづいて、後半の「大鳥は何ぞ鳴く云々」では、死とともに二羽の鳥と化したという伝承を素材として問呵したものであると解釈されるのである。

このように、陰陽の結合とその分離のテーマにつづいて二物の結合に関連のある蒋号（翳）と脅鹿の絵が廟壁上に描かれていたということは必しもあり得ないことではないし、あるいはまた前者が後者への連想をよびおこして、これを屈原が自問したということもまた考えられる点である。つまり、屈原はこの二つの章にわたつて陰陽の和合をテーマにした一連の説話伝承を俎上にのせて疑問にしたものと推定しているのであるが、もし蒋号（翳）と協脅（脅鹿）が単に二物の結合といつた物理的状態を意味するだけではなくて、雌雄・牝牡の和合・孳尾をいつているものと仮定されるならば、上の想定はあながち、我が田に水をひく解釈ではないといえるであろう。しかし、そのためには、蒋号（翳）と協脅（脅鹿）の語の中に、陰陽のまじわり、雌雄の交歓の意味が含まれていることを示さなければならなくなつた。そ

こで再び、協脅の鹿と蒋号（翳）の容姿を特徴づけている例の二つの首と八本の足の実態と、それらが示す意味を詮索してみなければならない。

四

協脅した神鹿のその一つの体軀にあるといわれる二つの頭首の位置について、これを具体的に説明した文献のあることをしらないが、『山海経図』『離騒図経』など絵図にされたものは幾つかある。絵画上のこの神鹿は一対の鹿が左右に相並んで立ち、互いに体軀の一面を接しあつて一体となるか、あるいは前後に臀を向けて並らび、それ〴〵その臀部を合わせて一身をなしているかのいづれかであるが、これらは確実な根拠を示した上での図絵ではなくて、おそらく王注などによつて描いた想像画にすぎないであろうけれども、いづれにしても一身二首八足の鹿という古注に基づくかぎりは、上掲の二例以外の他の恰好は想像しがたいといわなければならないが、さて、その妥否はどうであろうか？

ところで、これに答える前に、事の順序として同じく一身両頭といわゆる并逢・并封の頭首がどうであつたかについて一考しておきたい。これについては上掲したように『逸周書』および「海外西経」には、体軀の前と後にあるといつており、これに対して「大荒西経」の方は前後といわずに左右という表現を使つている。このため清の郝懿行は「海外西経」にいう彘のごとき状をした并封と、この「大荒西経」の屏蓬とよばれる奇獣とは全く別個異質の存在であろうといつているが、[9] 共通した呼び名と、相似た一身二首という様子をしている点から考えて、よしたとえその存在の客体に相違があるにしても、一つは相並らび他は相背むくというように、違つた恰好をしていたとは考え難いものがある。実は左右といゝ前後というその形容は異つているにしても、一身の両端にある二つの頭首を、一は側面に立つて描写し、

他は正面から望んだという、観るものの位置の相違から、異つた表現がなされたのにすぎなかつたのではないだろうか？　郝懿行は「大荒南経」に出てくる、南海の外、流沙の東に棲むといわれる左右に首をもつ跂踵と呼ばれる怪物をとり上げ、これもまたその首の位置によつて、「海外西経」のいう前後に首のある并封と同類とは考え難いと疑つているが、これもまた左右・前後の文字にとらわれた見解といえるかもしれない。たゞ、跂踵のことを記した「大荒南経」の本文中に、并封のたぐいの表現がみえておらず、また跂踵そのものがどのような存在かも確かめ難いから、この問題のみは保留しなければならないとしても、并封・并逢とよばれた一連の怪異のその首の位置をめぐる前後・左右という表現上の差異は、もとよりそれが実在するはずもない空想上の神獣であつたろうから、空間的にも時間的にもずいぶん変貌してもいつたであろうし、またこのような怪力乱神の類に余り関心を示すことの多くなかつた昔の学究たちが碌に詮議もせずに適当に筆墨に写した結果、後世解明し難いほどの混線を生んだのではなかつたかとも考えられるし、あるいはまた、并封・并逢とは二つの生物が一つに結びあう有様の名であつたとすれば、相並ぼうと相背むこうと、それはとくに問題とはならず、従つてあるものは首が左右に并列して同一方面をむき、あるものは前後に位置して互いに逆方向を望むとしても別に不思議とするには当らなかつたのかもしれない。

以上のように、協脅の神鹿にしろ、蓋号（蓋翳）とよばれる雨神にしろ、その共通してもつ二つの首の位置についても同様に、左右と前後という二つの形を想像することができるのであるが、目下の懸案はその二首のもつ意味であり、さらにこれらに陰陽・雌雄の交合の意味ありや否やである。

まず、蓋号（翳）の語の吟味からはじめるが、こゝで想起されるのは聞一多氏が『伏羲考』[10]の中で論考した并逢の文字の解釈である。聞氏はさきにも言及した并封・并逢・平逢の本字は并逢の語であつて、しかも并と逢とは同義語で、

并逢とはまさに禽獣の雌雄・牝牡が相交わるさまをいった言葉であろうとした。(11) 今、同氏のあげた諸資料に補足を加え、その訓解の可能性を明らかにしてゆきたい。

さて、さきに例示した資料の再掲もあってやゝ煩雑、冗漫の文となるそしりはまぬかれないが、まず「大荒南経」に

三青獣の相并するものがおり、名ずけて雙雙という。

とあるその「相并する」とは体軀を通じあう意味であることはすでにいった。たゞし三という数字にはやゝ拘泥され、疑惑の感じられるものがあるが、この奇獣に与えられた称呼と同じ名が鳥名にもみとめられる。すなわち『公羊伝』宣公五年の条の雙雙の文字の疏に

雙雙の鳥は一身二首で、尾に雌と雄があり、随便にして偶し、常に離散せず。

といわれているが、一身で二首、しかもそれに雌雄の別があり、その両性が偶して離散せずといって、二羽の鳥の并逢・協脅する様を描写しているのは、実は本来雌雄の鳥の交尾の状態を表現したものではなかったろうか？ こゝで誰もが想起するのは「比目の魚」と並び称せられてきた「比翼の鳥」であろう。これは『山海経』、『爾雅』、『呂氏春秋』、『管子』、『史記』、『搜神記』など、多くの古書に、東方ないし南方に棲む瑞鳥として頻出し、山東漢武梁祠の壁面には、二羽の鳥が二魚とともにそれぞれ相並んで、体を一つに併わせた姿で図示されており、その讃には、ともに「王者の徳高ければ、慕つて遠くより至る」という吉瑞とされている。古来、比翼の鳥は一翼をもつ二鳥が相寄り相添つて一身同体をなし、はじめて飛翔するとされてきたのであるが、この二羽の鳥が一つがいの雌雄であったことは、並枝つまり連理の枝とならべて、夫婦の深い契りを比喩されてきたことからも理解されよう。『博物志』にはこの比翼の鳥の記載があって、これを長離とよび、とくに雄の方に野君、雌の方に観諱という名すらあたえて、雌雄一つがいの鳥であるこ

とを明示している。

一体、この比翼の鳥の淵源が「関々たる雎鳩」のそれのように、君子・淑女の嘉配・睦しい夫婦人倫の至極をたゝえた道徳的倫理的思想から生み出されたものであつたかどうか？　もとより、その経緯を今日、実証することは容易でないけれども、実は民間に流布し人々が少なからざる関心と反応を示したものと考えられる**并**逢交合したある種の禽獣にまつわる土俗が、後世の倫理学の徒、または文人詩家の麗筆によつて、止揚され昇華された可能性が果してなかつたかどうか。

比翼や雙雙の鳥に関連して同じ『博物志』にみえる同頸二頭の住民の存在も見おとし得ない。すなわち、蒙雙民とよばれる不思議な辺民ついての伝承として、

昔、高陽氏のとき、同産で夫婦となつたものがいた。帝はこれを野に追放したが、相抱いて死んだ。神鳥は不死の草をもつてこれを覆つてやつたので、七年たつて男女ともに活きかえつたが、同頸で二つの頭と四本の手があつた。これを蒙雙民という。

と伝えているが、同腹でありながら夫婦となつたといわれるこの蒙雙の民は、例の伏羲と女媧が兄妹の身でもつて夫婦となつたという神話古伝説に吻合するのは見逃すことができない。[12] やがて詳しく説明するつもりだが、伏羲、女媧の像は漢代以降の壁画や彫刻上にしばしばあらわれ、しかもこれらは交尾の姿で表示されているものが多いのであり、『博物志』が蒙雙民について形容した同頸二首とは「相抱く」という描写とともに、実は交合の有様を描写したものであつたと考えるのである。この異形の民を雙の文字を使つて呼んでいるのも、果して偶合であろうか。雙雙の鳥の雙字と関連して注意される点であろう。

ところで問題は并の字であるが、これが単に二物の結合のみでなくて、男女雌雄の交合をも意味しうると推測しているのだが、この点に傍証となるのは姘の字である。『説文』にこの文字について

漢律に斉民が妻婢と姦することを姘という。といゝ、段注もいつているように、庶民が他人の妻や婢女と私合するという限定があるにしても、とにかく漢代、姘という言葉が男女の交歓を意味していた。『蒼頡篇』にもまた、

男女私合することを姘という。

と記述されている。

并ないし屏・平が雌雄男女の性的結合を明白に意味した用法は寡聞にして知らないが、これらは姘と同音であることはいうまでもないことであり、一身二首を表わした并逢・屏蓬・平逢のたぐいが、聞一多氏も推論したように[13]、本来両性の相交わる有様を意味したものとする解釈は必しも牽強附会の説だとは考えられないのである。しかし『詩経』・「周頌・小瑟」の

予を荓蜂するなかれ。

の荓蜂は、「毛伝」に摩曳の意味に

また『爾雅』釈訓には、

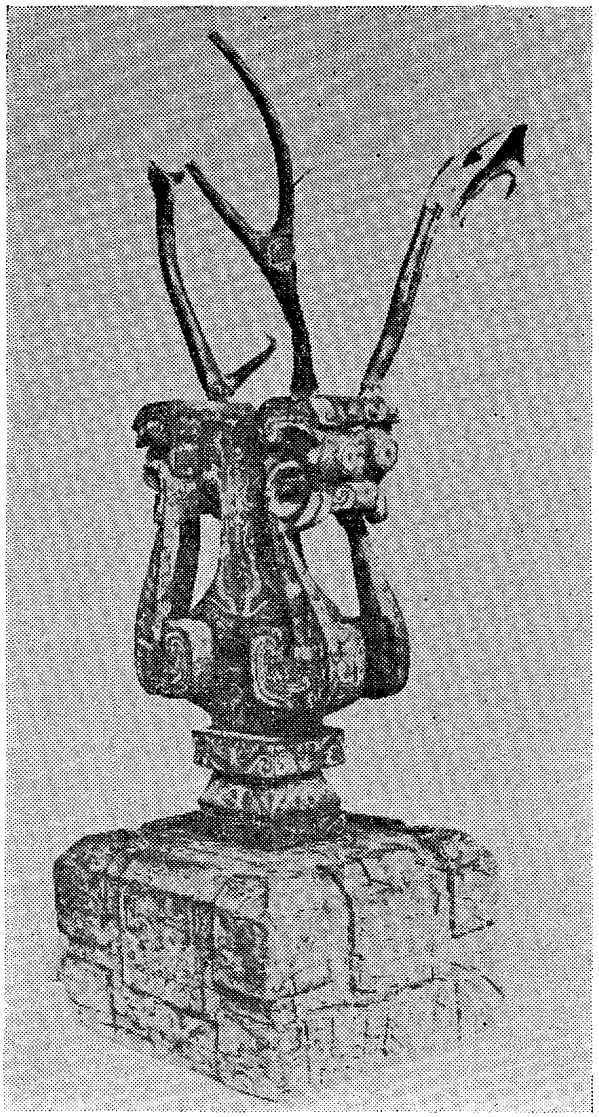
甹夆は掣曳なり。

とあり、荓蜂・甹夆はともにしば〳〵のべてきた并封・屏逢などと同音の語でありながら、こゝでは曳きあう・曳き込むというほどの意味に使用されていて、結合する并逢とは一見相反する言葉のようにみえるが、実はこれはあたかも一身の前後に首をもつているように雌雄が并逢しているさまに対する違つた表現にすぎないのではないかと思われるので

あるが、このような并逢⇅甹夆の語をめぐる推測は、以下にみるように協脅の鹿についても同様に考えられるのである。

五

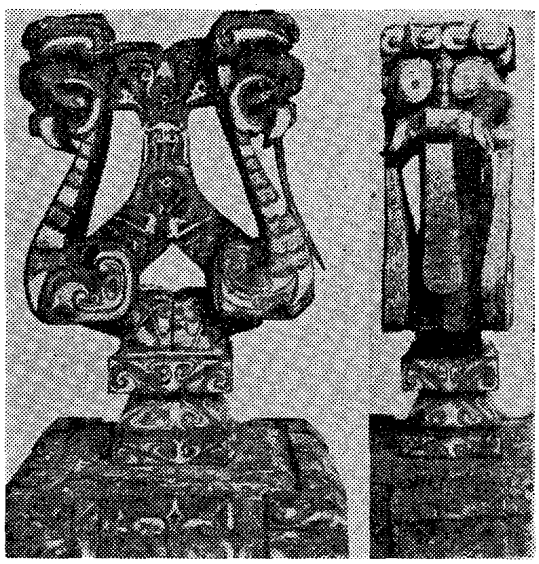
さて、『楚辞』王注にいう一身両頭の脅鹿は、かつて梅原末治博士によつて紹介された湖南出土と伝えられる木雕怪獣像[14]に、その具体的な姿をみることができるのではないだろうか。つぎの第一図がこれであるが、この木彫像の細部にわたる解説は博士の関係論著にゆづるとして、まづ、眼をひくのは、二ひきの怪獣がたがいに背中をあわせ脇腹を共通にして連結し、二身のごとくにして一軀という不可思議な姿である。後の脚は省略されて確かめがたいが、前脚はそれぞれ体からやゝ離れ、両頬に添えられている有様は、第三図との照合によつてはつきりしよう。さらに頭の上の小孔に挿しこまれた角は、その一個が失われてみえないが、本来、両獣とも双角を戴いていたことはいうまでもなく、これらはみな鹿の角をそのまゝに使用されていることもはなはだ興味深い。そのほか、長い吐舌（第二図参照）や怪奇な面貌なども眼をひくが、とにかく以上の諸特性をもつ



第　1　図

ているこの怪獣像が、協脅した神鹿の具象化されたものだといって、無理からぬもののように思われる。

この木彫の作成年代および出土地については、梅原博士が戦国の後半期に属し、昔の楚国の地、湖南省長沙付近と推論されていることは、江南の山野を放浪し、汨羅に死んだ屈原の後半生と無関係ではなく、もし、屈原が先王の宗廟の壁画をみて「天問」を創つたとすれば、協脅の鹿とは、まさにかような絵で示されていたであろうと思われて、はなはだ心強い。



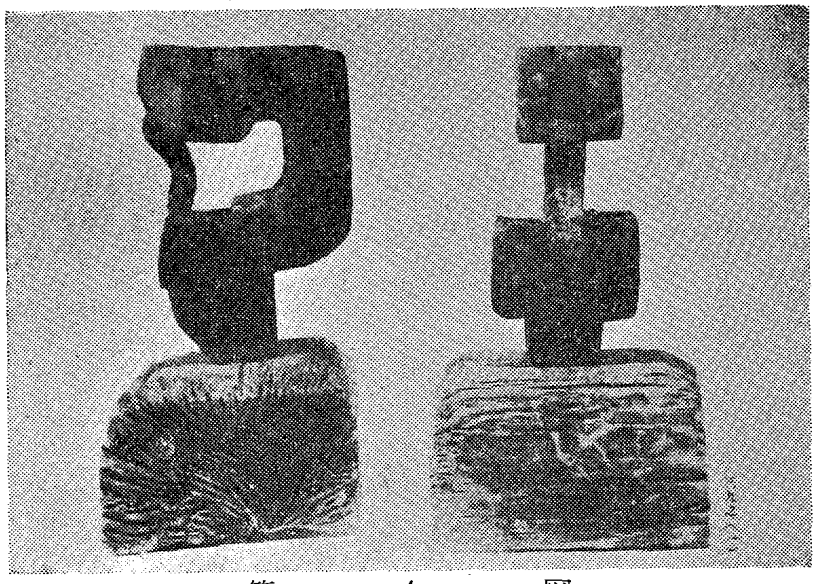
第3図　第2図

ところで、この怪獣像を二ひきの神鹿が并逢、協脅したものと推定したのは、この像の中央部から縦に二分したシェルエットが（第三図参照）同じ長沙出土の護墓神といわれている第四図の木彫像[15]や、同じく長沙戦国墓出土の第五図の護墓神像[16]にきわめて似ているからである。第四図は第一図にくらべ、造作がいちじるしく粗雑で、わづかにその輪郭を示しているにすぎない上、頬にあてた前肢も頭上の鹿角もみとめられない。また顔面もほとんど偏平で細工らしい細工もないが、わずかに刻まれた巨大な両眼と長く垂らした舌とは、この木像も第一図と同類の怪獣であることを物語つている。

一方、第五図の像もまた前肢を欠き、同じように顔面その他の造作も簡単だが、わづかに朽ちずに残つている双方の角と長い吐舌とは、まぎれもなく第一図のそれと吻合するものである。ことに第四、第五図とも、句屈した体軀とこれを台座に据えた形式上にみとめられる一致は、協脅の有無はあつても、いづれも同じ信仰に基づき、共通した神怪を素材として作成されたものとみてさしつかえないであろう。細工上にみとめる様式的な差違は、作成の精粗巧拙からきた

ものにすぎないだろう。

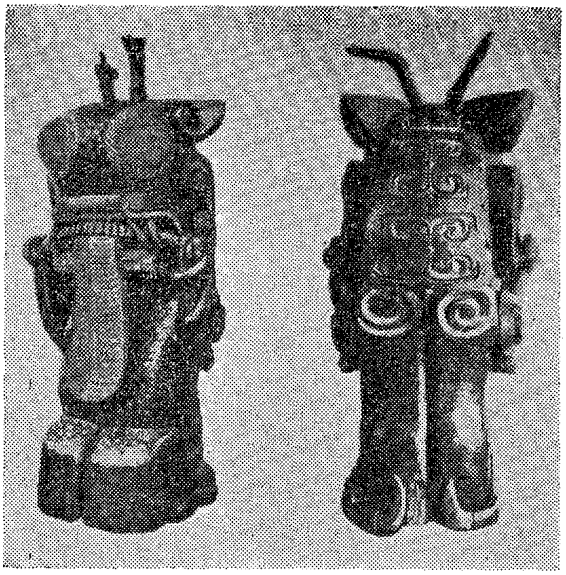
しかしながら、第一図の木雕怪獣像との比較としてならば、より参考となるのは先年、旧楚国の北方の要衝・河南省信陽近郊に遺された春秋後期～戦国期の木槨墓から出土した漆絵の施された二基の木彫であろう。こゝではその一つを示すにとどめるが、それは信陽県北方二十五粁の一小村・長台関にある諸侯またはこれに準ずる統治階級のものとされる第一号大型墓出土のものである。[17] この怪獣像は高さ約一・四米の大型木彫で、第六図[18]にみるように全身彩色がなされており、しかも豹斑とも鱗文とも思われる体文のあることに注意しておきたい。四肢には長く鋭い爪が延び、開いた口からむき出した牙が不気味に光っている。しかしとくに注意をひくのは赤く塗られた巨眼と大きな口から吐きだされた長い真赤な舌と、それに頭上に生える二本の角であろう。この角がもと〳〵長い鹿角であったという推定は第一図の鹿角上に施された図様との比較などからも誤りあるまい。



第　4　図

第　5　図

つぎに大きな口に嚙んでいるのは蛇であるが、この蛇の両端をつかんでいるのが前肢である。もし、この構図で蛇を欠くならば、この前肢はあたかも頰に添えられた恰好といわなければならない。そこで想い出されるのが第一図の怪獣像の前脚である。いわば第六図の跪坐状の鎮墓獣は協脅并逢した第一図の半身とその特徴がことごとく共通しているのである。



第　6　図

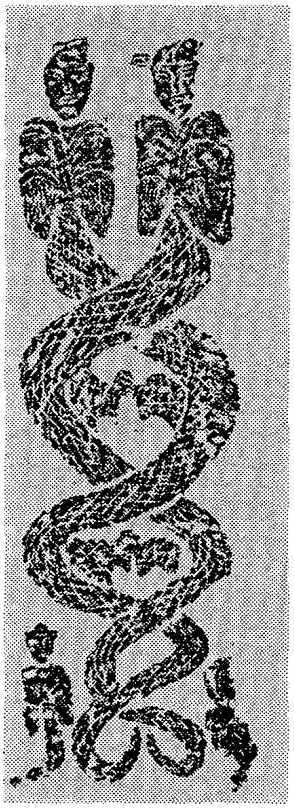
以上みてきたように、もちろん空想上の神獣で、その何ものであるかについては、次稿にゆづるとして、頭上に飾られた大きな鹿角がひときわ眼をひき、梅原博士紹介の伝長沙出土の怪獣像と第四図以下の神獣像とは協脅の有無はあつても、すべて楚人の崇めおそれた同じ鹿様の神を素材としたものとみて誤りがないのでなかろうか？これらがおゝむね戦国期に属し、しかもかつての楚の地において発見されているのも、決して偶然のことではないであろう。

しかし、第一図の協脅した怪獣像が第四図以下の墓鎮と同じ鹿様の神獣だとしても、果してこれが牝牡の并逢・交尾した姿を表わしたものだといえるかどうか？　造作は必しも写実的でないが、交尾状と解釈するには少なくとも不合理な点があつて、この点は当然起つてくる疑問であろう。しかも、こうした神鹿并逢像は他に類例がないのであつて、これを交尾状と決する確実な根拠はないのであるが、もしゆるされるならば、パラレルな例示を他の遺物に求めて、卑見の可能性を開陳してゆきたい。従つて、しばらく論材をかえなければならない。

六

漢代およびこれ以降中世期ごろまでの墓壁画などにしばしばみとめられ、人々の関心を呼んでいるものに伏羲女媧の図がある。創造神であり、三皇五帝の一に算えられる伏羲女媧に関する研究、論著は古来少なくないが、中でも人首蛇身の形で描かれるこの二神の交尾図を、苗族などに伝承されている神話・伝説と関連して論じた聞一多氏の研究は、この際とくに私の興味をひく。[19] しかし聞氏の「伏羲考」が世に出たあと、とくに最近の中国大陸での考古学的成果として、この二神の交尾を示した恰好な図が数多く現われ、しかも従来しられなかつたその泥像も出土し、この研究に多くの示唆を与えるようになつた。

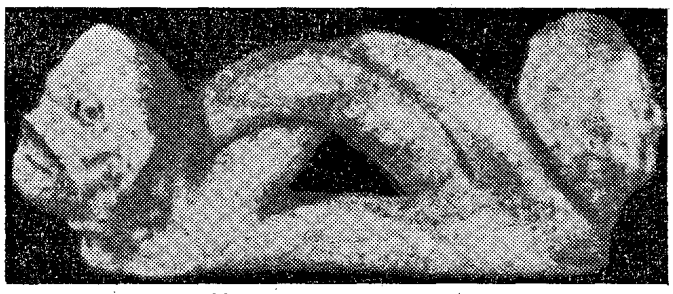
人首蛇尾の伏羲女媧図はもちろんすべてが交尾状に描かれているわけではない。たとえば、四川省崇慶出土の漢画象石上の二神図[20]や、山東沂南北寨の漢代ないしそれよりやゝおくれるかとも推定される画像石上の二神図[21]のように体軀の相交わらない構図も決して少ないわけではないが、しかしその多くはすでに著聞している東漢期の山東武梁祠石室画象上の伏羲女媧の図をはじめとし、四川省宜賓市翠屏村の漢墓第七号墓石棺北壁上の伏羲女媧の彫刻[22]、江蘇省徐州漢墓の画象石上にみられる二神図（第七図）[23]など、互いにその尾を交じえ、あるいはからみあつて交尾の状態をあらわしているものがはなはだ多いのである。



第　7　図

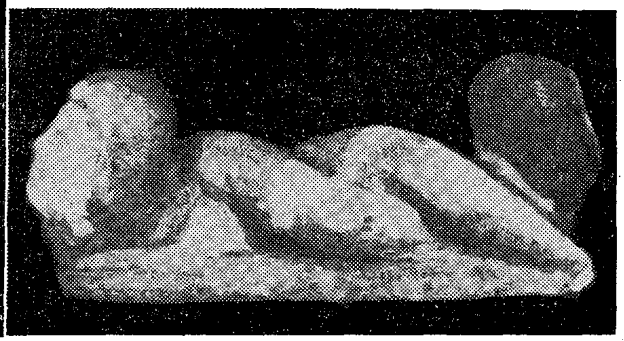
ところで、こうした交尾状を塑像上に表現した場合の姿が

第八図第九図第十図である。これらはすべて四川漢代墓からの出土品であるが、[24]第八図ではこの二神が雌雄であることは人頭のちがいによって推察される。第九図は二匹の蛇身がからみあって螺状をなし、また第十図は破損して、おそらく雄蛇と推定される半分を残すだけであるが、第九図より一段とまといあった様子を窺うことができる。とにかくこれらはまちがいなく人頭蛇身の姿をしたと伝えられる伏羲女媧の交尾像であると信じるのであるが、こゝでとくに注意したいのは、画象石上にみられる交尾図と、これと対応する塑像との表現上の相違である。すなわち、泥像の場合は、これを一身両頭という文字で表現してさしつかえない姿に造られていること、互いに背を向け、并逢して結びあっているとも、甹爭して曳きあっているともいゝうる有様に形づくられていることは、伝長沙出土の怪獣像（第一図）の解釈に少なからざる参考となろう。

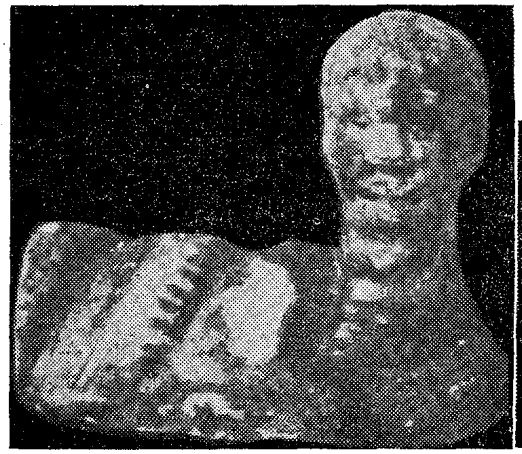


第　8　図

交尾する伏羲女媧の二神を絵画にし、塑像につくる習俗は唐代前後にはかなり広地域におよんでいたことが、当時の諸遺物によってしられるが、第十一図の四川彭山の後蜀期とされる墳墓出土の泥像[25]は、それ〴〵の人首に男女の特色がはっきり示され、『山海経』・「海内経」の



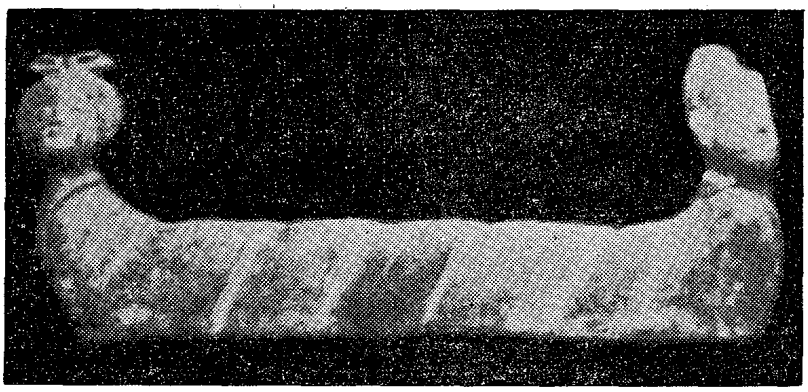
第　9　図



第　10　図

南方に……人あり、苗民という。また神があって、それは人首蛇身で轅のごとく長く、左右に首がある。紫の衣をきて、旃冠を冠しており、名ずけて延維という。

という表現そのまゝを塑像化したような伏羲の姿が、その右の首にみとめられる。そして互いにまつわりあつた男女二神の蛇身は一段と簡略化され、轅のように一身によってあらわされ、わずかにその上に刻まれた螺線にその原意をとどめている。



第11図

やゝ蛇足であるが、この螺状で表現された二疋の蛇身について想いだされるのは『爾雅』・釈地の「中央に枳首蛇あり」に付記した郭璞の

今、江東では、両頭蛇を呼んで、越王の約髪となしている。また弩弦とも名づける。

という注釈である。こゝでいう枳首蛇、つまり両頭の蛇はもちろん、尾をからみあう交尾の両蛇を指すものと考えられるとしても[26]、越王の約髪という、その意味は不詳であるが、おそらく越国の君主のうち被髪を編んで垂れたさまが、両頭蛇に似たものが居たからであろうと推論される。一方、弩弦とは第十二図のような形のもので、これが両頭蛇に似ているため、その異称となったのであろう。

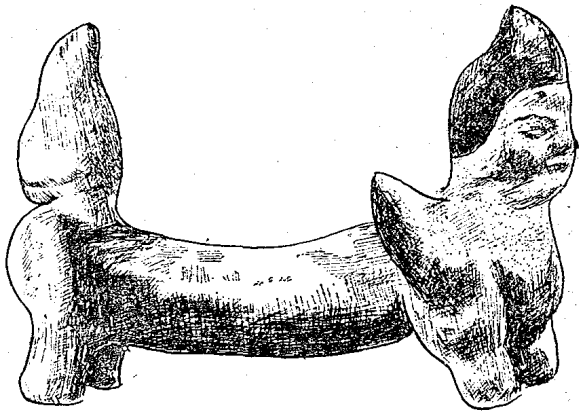
第12図

とすれば、『山海経』・「海内経」が「蛇身にして轅のごとく長く、左右に首がある」というその左右という表現は、蛇体の一端に二つの頭が左右に並列して、Y字型をなしている様をさすのでは決してないこと、総じて、并逢・并封した禽獣の表現に、「左右」

といつているのは、あらかじめ私見をのべておいたように、実は前後とも表現することのできることを確かめ得たのではないだろうか。とすればつぎに記した西漢・賈誼の『新書』にみえる荊楚地方の禁忌の蛇は、おそらく三・四世紀の交の郭璞のころに、江東で越王の約髪・弩弦と呼んでいたものと同じような存在であつただろう。『新書』によれば、孫叔敖の幼年時代の逸話として、彼が戸外で遊戯中、たま〳〵眼にしたもの必ず死ぬという俗信のある両頭の蛇を見たが、彼は他の人々も、またこれを見て禍が及ぶことを恐れ、その蛇を殺して埋めたという。この孫叔敖は『史記』の循吏列伝にもみえている春秋時代の楚の処士で、のち荘王に仕えて宰相となり、令名をはせた傑物である。

以上、伏羲女媧の交尾図、ことにその泥像遺物を中心にした論述によつて、第一図に示した戦国期の二怪獣の連絡木彫が、并逢交尾の様を表現したとみる妥当性がある程度あきらかにされたものと思う。われわれは当時の作品にみられる必しも写実的でない存在を、その故のみで不合理と判断して、その本意を看過してはならないことを改めて考慮する必要がある。

しかし、以上の例挙、あるいはそれらの比較に対して、異論をさしはさむむきもないでもなかろう。そして、もしその疑義が無足の蛇と四足獣との比較が果してこの際許されうるかどうかという疑惑であるならば、文字通り蛇足のうらみがあるが、并逢・協脅した四足獣の塑像例の一・二を示して、証明の補足としたい。といつても、遺憾ながら、先秦はもとより漢・六朝以前にもこの点に関する恰好な比較例が見当らないので、唐代の鎮墓獣によらざるを得ないが、四足獣が并逢して塑像に表現される場合、どういう形をとるかという例示としては、この時代的落差は必しも全く不都合とはいえないだろう。



第　13　図

さて、第十三図は山西省太原南郊の金勝村から出土した唐墓の遺物[27]で、魁頭・独角獣などと伴出したものであり、つぎの第十四図A・Bは同じく山西長治北石槽の唐墓出土の双頭鎮墓獣[28]であり、いづれも、まさしく一身にして前後に首をもつ并逢のさまをあらわしている。

しかし、同じ形式の鎮墓獣では湖南長沙出土の遺物は一層興味深い。第十五図がその長沙黄土嶺の唐墓出土の泥像[29]であるが、これを同じく長沙黄泥坑の唐墓より発掘された遺物、第十六図の泥像[30]と比較してみよう。一つは一獣、他は二疋の獣の連絡という違いはあつても、同一の四足獣を塑像化したものとみて誤りがないであろう。注意すべき点は、前者が明らかに四足をもちながら、後者は二疋を并逢させた結果、ともに後脚が省略されていることである。第十三図および第十四図が前肢だけであるのも、同じように解釈されるであろう。とすれば、漢武梁祠後石室の中に画かれた、頭をやゝ垂れ、背を太鼓橋のようにして風雷神の前に据えている両頭の竜?も、以上の諸例に照してみて、并逢交尾の図なのかもしれないし、陝西綏徳軍劉家溝東漢墓出土の石刻門框上の二首奇

第　14　図　A

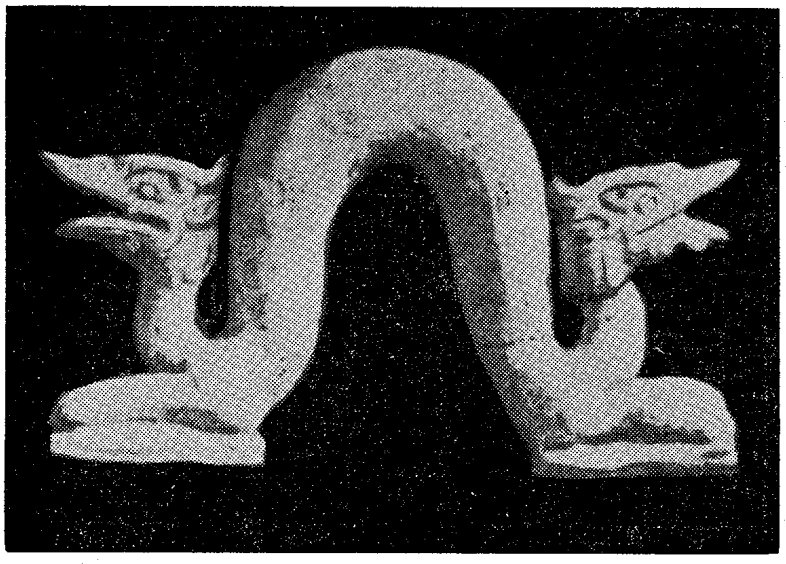
第　14　図　B

獣図・第十七図[31]の上部もまた并逢獣を描写したものに違いない。

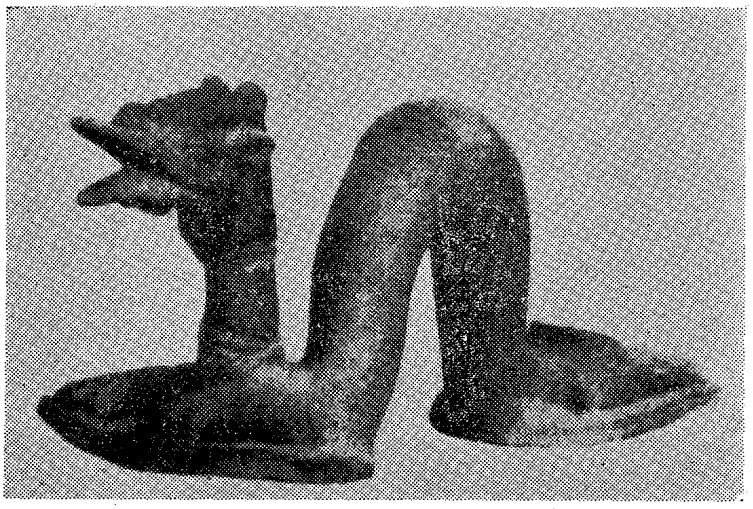
七

伝長沙出土の怪獣像を「天問」にいう一身二首のいわゆる協脅の鹿のたぐいと解釈した根拠はおゝむね以上のようであるが、隴を得て蜀を望む憾みがあるけれども、荊楚の地から出土したつぎのような一連の結尾禽獣木彫もまた、同じように并逢した雌雄、牝牡を表現したものではなかつたろうか。

その一つは、上記長台関第一号楚墓より発掘された一木造りの臥虎？像であるが、それはほゞ相似た一対の動物が互いに背を向けあつて、その臀部を接した形をとつている。両者の肩の部分には小さい方形の孔がそれ〴〵二個、同じく臀部には一個の方穴があり、さらにこの臥獣像と並んで禽獣の脚肢

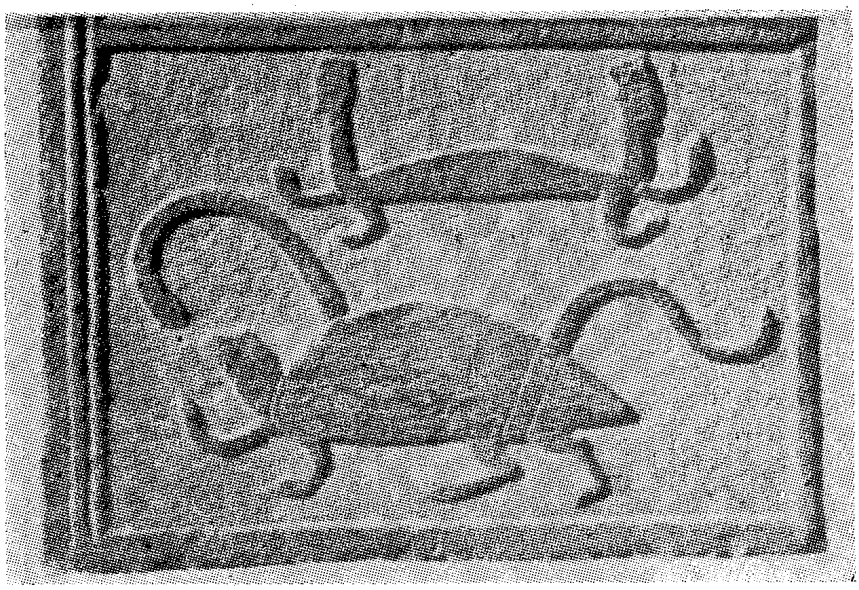


第　15　図



第　16　図

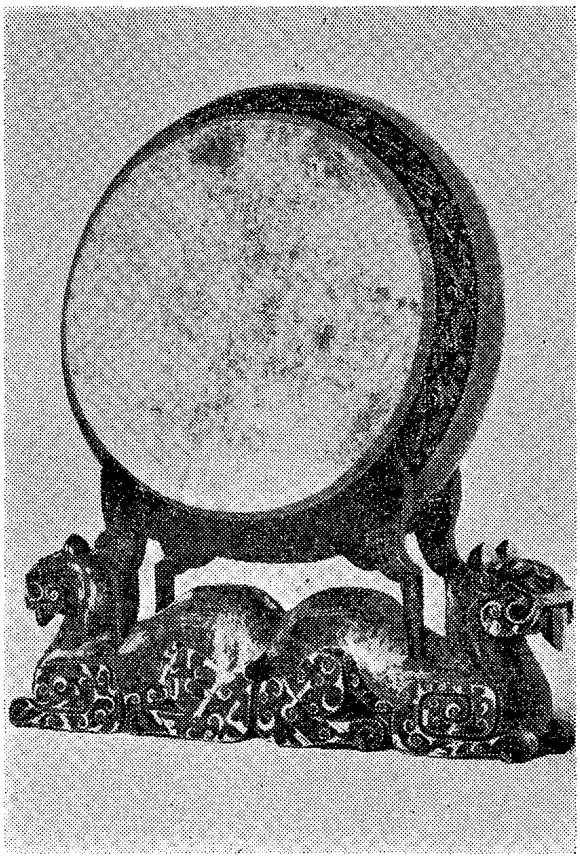
を象つたと推定される四個の支柱と太鼓の遺残とが伴出しているところから、陳大章・賈峨の両氏は、四本の肢脚は太鼓をのせる支柱で、問題の連結の臥虎はこの台座であろうと解釈し、[32] 第十八図[33]のような復原を試みている。なおこの復製には信陽西北約一七〇粁の南陽にのこされている漢画像石中に、連尻伏虎上に一個の太鼓が置かれ、その両側に各一人の鼓手が捧棒を振う刻画のあるのが比較参照されている。たゞし、陳・賈両氏も認めているとおり、この復原による限り、臀部上の方孔の処遇が問題として残されるのであるが、最近、袁荃猷氏が、この両氏の試みに異説を唱え、第十九図、または第二十図のような復原の妥当性を主張した。[34] 彼のその試案はまづ四片の鳥脚から二羽の鷺鸞を想像し、ついで陳・賈両氏が手をこまねいた臀部上の二個の小孔の処置と、上海博物館蔵の戦国期とされる青銅製の「刻紋燕楽画象楕栝」上にみられる二羽の鳥を台座にした太鼓の絵・第二十一図[35]下段左との比較とがその主なる論拠となつておるが、さらにつぎの長台関第二号楚墓出土の雙鳥雙虎像もまた、この復原に重要な示唆を与えている。第二十二図[36]がその雙鳥雙虎像であるが、これはいわゆる「雙雙の鳥」を連想させるような尾翼を連接した二羽の鳳凰らしき鳥と、これを支える台座とから成りたち、しかも台座がまた伏虎を表現したものと考えられる二疋の四足獣が一木でしかも并逢状に彫まれているのである。この木彫像と伴出した遺物に、太鼓の残欠や編鐘・磬などの楽



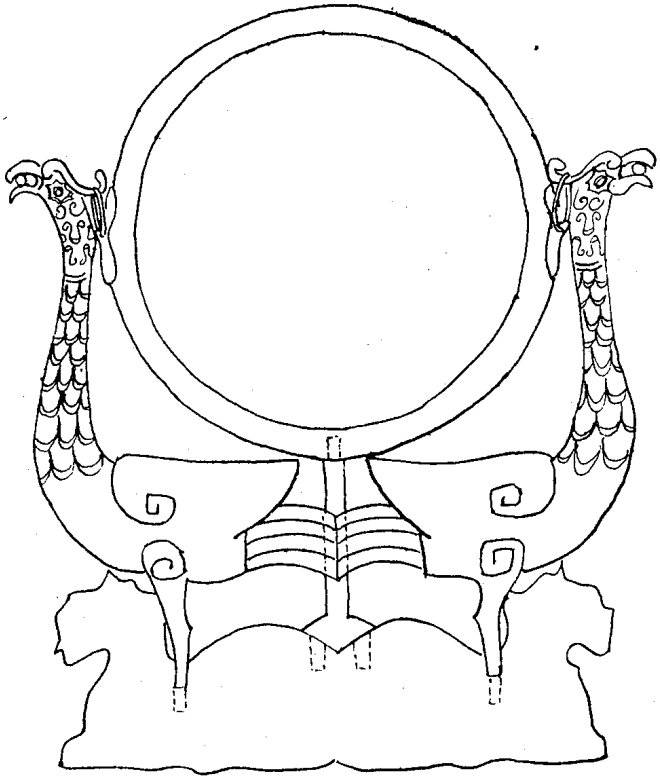
第17図

器がある点から、袁氏は本来この木彫の鳳虎は鼓とセットをなすべきもので、鼓座であつたろうと推測している。なるほどこの木彫は、上にあげた第二十一図の太鼓を支える鳥の姿と形式は類似しているけれども、果して太鼓を載せて実用に供し得るものかどうか、技術的に疑問がもたれないこともない。しかし反面これは明器であるという特殊性も考慮されなければならないが、いづれにしても、これを嘱目して、直接操作し、実際に測定できないのは残念である。

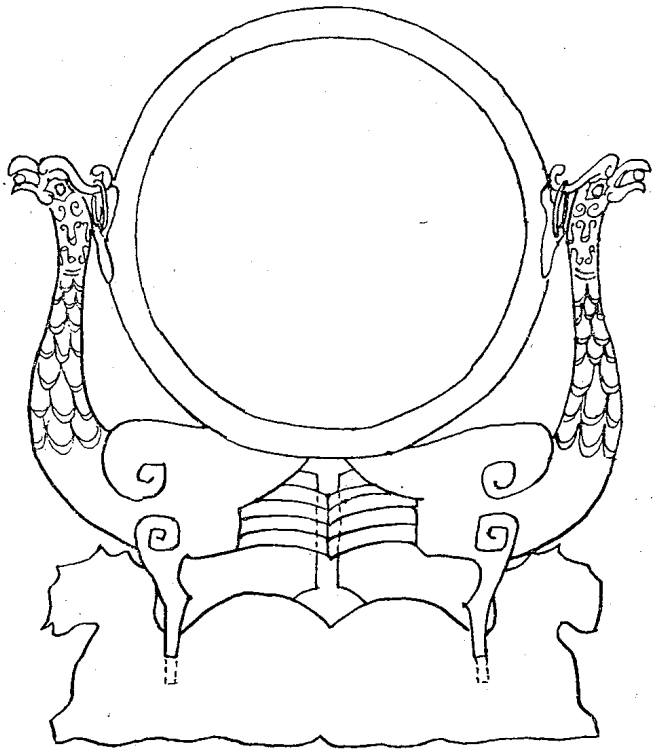
この木彫像の鼓座説の可否論は当然、つぎの第二十三図[37]の木彫雙鶴雙蛇像にも関連してこよう。これは湖南長沙出土と伝えられ、同じく戦国期の製作になるものと推定されている。[38]この木彫はやゝディホルメされた二羽の鶴状の鳥と蟠螭文状に纏絡する二疋の蛇の台座から出来ているが、鳥の脚



第　18　図



第　19　図



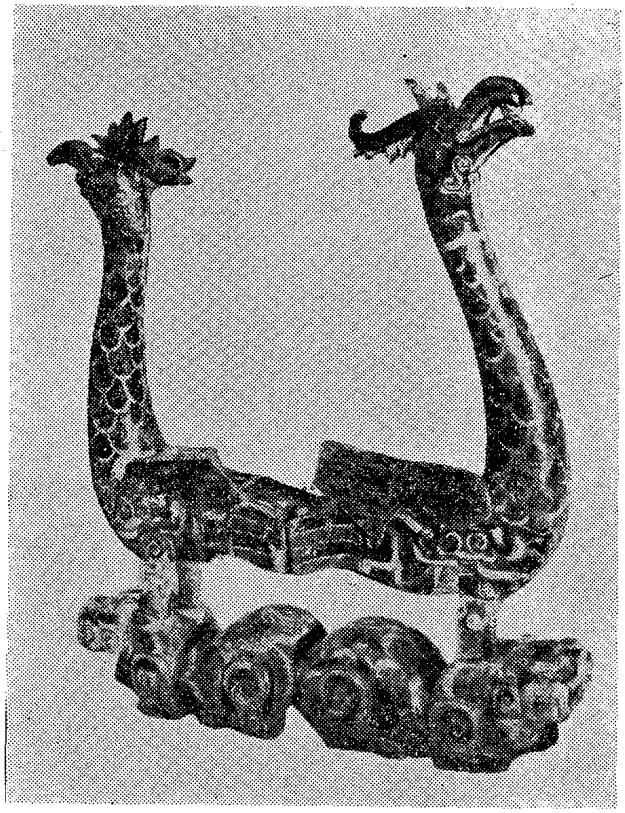
第　20　図

はその台座上の挿し込み用の方孔に立つように造られている。

ところで、この組立て方には、当初から問題があった。梅原博士は第二十三図のように二羽の鶴は互いに正面を向きあって立つべきだとの見解をとられた。鳥と蛇との組合せは戦国青銅器上の文様にもその例は少なくない。たとえば獣銜鐶狩猟画文壺の首部

第　21　図

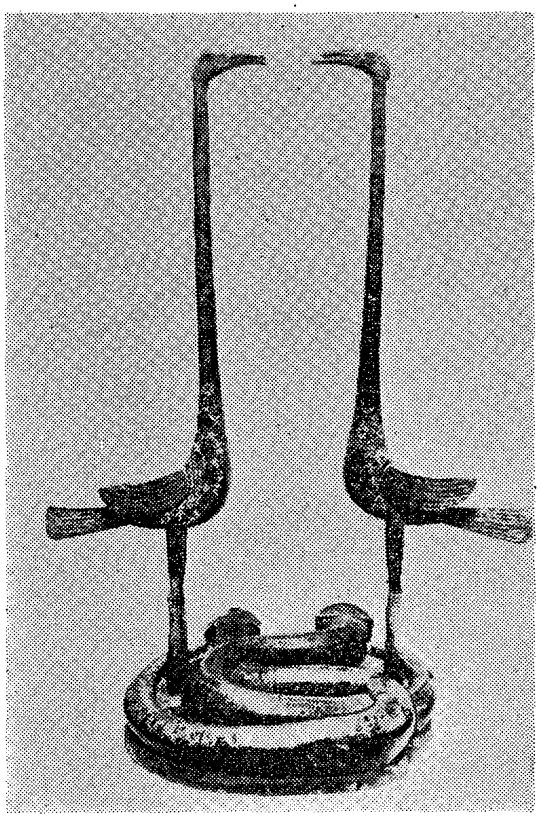
にみられる雙鳥雙蛇図（第二十四図）はその一例であるが、中央の二匹の纏絡蛇をはさんで二羽の禽鳥が相対峙する図柄は他にも類例がある。とすれば、この伝長沙出土の雙鶴雙蛇像も、あるいはこういうモティーフに関連したものとして、一考する必要があろう。にもかゝわらず私はクリーブランド美術館東洋部に在席されたホリス氏の組立て方――つまり、鶴は互いに背を内にし外を向いて立てるという構図第二十五図もまた無視できないものと思うのである。この組立に関するホリス氏の見解、およびこれに対して生じる疑義のいち〳〵については、梅原博士の論文「湖南省長沙古墳の一括遺物に就いて」[39]によられたいが、ホリス氏の試案中でとくに問題とされる点は、梅原博士の疑っているとおり、



第　22　図

背を向けあつて出来るその空間に太鼓を吊したにしては、いかにも二羽の鶴の造作が華奢であつて、どうして太鼓を吊すか、果して実用に堪えうるかと疑われる点であろう。

しかし、こうした疑問は程度の差はあるが信陽出土の木彫雙鳥雙獣の場合も同様であつた。雙蛇の台座上の方孔に挿入される鶴の脚端が、梅原博士もホリス氏もともに密着し、より安定することを有力な理由として、それ〴〵相反した組み立て方を主張されているのであるが、実物に即して実験してみることの出来ない私には、この点に関してはいづれとも答えることが不可能であるけれども、ホリス氏の主張に従つた場合、両方の尾翼が接近しながらやゝ空隙の生じている点と、梅原博士の指摘するとおり全体の構図からみて、上部がやゝ開きすぎて、不安定である弱点はたしかに否定できないけれども、なお、向背の復原図への執心を捨てきれないのは、上掲の并逢の諸例、就中、信陽出土の木彫像と

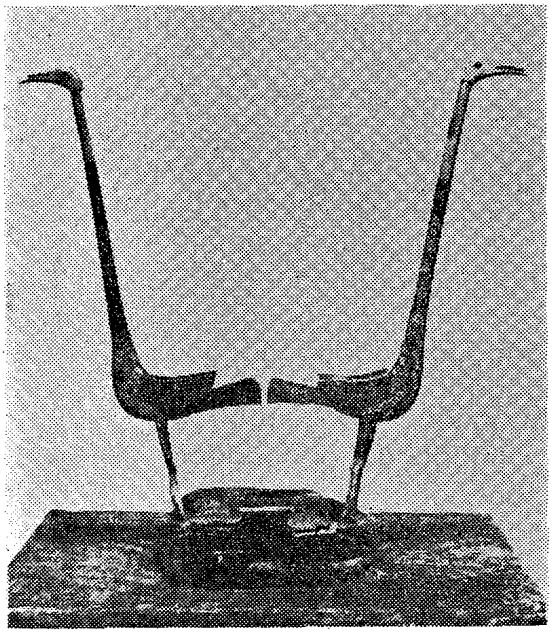


第　23　図

の比較などからである。

しかも、この推論をおし進める上に参考となるのは、ホリス氏の報告に述べられている本遺物の発掘情況を提供したコックス氏の所蔵するという一葉の写真である。ホリス氏の報告ではその写真の実物がどこに現在するのか、その点明確ではなく、しかもその写真それ自体をも私は実見していないから、参考資料としては当然慎重に扱わなければならないというより、むしろ疑わしくもあるが、とにかく、報告文によって推察すると、コックス氏は長沙における木彫雙鶴雙蛇像の発掘を親しく嘱目しており、同写真の遺物はそれと同期、同一地点の出土品のもののようである。[40] さて、その写真にみられる遺物は一木造りの雙鳥像で、しかも互いに背を向け、尾を接触さしているという。もし戦国期の楚国の長沙地方にも、連尾をモティーフにした雙鳥の塑像が存在したということが事実ならば、問題の雙鶴雙蛇像の復原図を考える上にも少なからず示唆となろう。もつとも、この鶴を仮

第　24　図



第　25　図

りに互いに向背して立てるものとしても、これを并逢状とするには、さきほどもふれた通り尾翼の間にみられる空隙が問題となる。この疑義に対しても、地下に埋もれた久しい歳月に蛇上の孔穴が変形し、これにはめこむ華奢な鶴の脚の枘との間にゆがみが生じた事が関係せぬかとか、あるいは、当時并逢のテーマが既に様式化していて、この尾翼間の微隙はさして問題とすべきものではなかったろうかというような姑息な弁解も不可能ではないが、問題の少なくない遺物でもあり、これは除外とし、今後比較参照されうる資料の出現をまって再考することとしたい。

八

迂余曲折がはなはだ多かったが、以上の并逢・協脅に関する諸記録ならびに連尾・交合の姿態をとる考古学的諸遺物を通じて、「天問」に詠われた脅鹿の具体的容姿を伝長沙出土の怪獣像（第一図）にみることができるのではないかという私見をのべてきた。そしておそらく、『後漢書』の「西南夷伝」の外、『博物志』、『華陽国志』の「南中志」その他の史書[41]にいう一身二頭の神鹿とは、まさにこのような姿をしていたであろうと考えられ、さらに南朝宋の盛弘之撰の『荊州記』に採録された湖南地方の伝承に、

武陵郡の西に陽山があり、鹿のような獣がいる。前後両頭で、常に一頭をもって食べ、一頭をもって行く。山中に時にこれを見る者あり。[42]

といわれているその神鹿もまた、長沙の戦国墓から出てきた一身二頭の怪獣像と異質の信仰の所産であったとは考えられないのである。

それと共に、上掲の并逢・協脅した諸像はすでに様式化されており、製作者の技巧のあとも多分にみとめられる美術

品的存在であるけれども、しかしそれらは単にシンメトリカルなものを美的と観じて、好んで用いられたモティーフ、いわば美術流行上の所産ではなくして、一身両頭と表現されうる并逢の神怪によせる当時の人々の土俗・信仰がその存在の背景に潜んでいたと想定されるのである。もし、そうではなくして、協脅が単に美術上の一構図にすぎないものならば、天地・神霊に関する疑問の文学といわれるこの「天問」の中で、屈原自身が敢えてこのような存在に問呵を発する筈がなかつたろう。

以上の考察にもし大過がなければ、冒頭で予じめいつたとおり、并逢も協脅も同じく牝牡・雌雄の交合している有様を意味したものであつて、両者は異口同音的な形容にすぎないことが明らかにされたのではないかと思う。そしてまた、その場合の二つの首の位置についての表現が、あるいは「左右にあり」とし、あるいは「前後にあり」といつているのも、本来、同一の状態を表示したものにすぎないこと、ならびに、もと〳〵、并逢と同音同義であるべき甹夆の語に対する従来の解釈は一種の望文生義にすぎないことをこゝで改めて想定するのである。

并逢とは今や、貝塚茂樹氏がいわれるような二つの仮面をつけて登場する山神[43]などでは決してないことは確かである。一身二頭の神怪とは二身にして一身、一体にして二軀なる故の二首なのであつて、一柱の神が二つの仮面を用いて出現する態の存在ではないのである。それと同時に、并逢の名はのちには結合交尾する特定の禽獣の称呼として固定した例は多いけれども、すでにふれたとおり、本来、その対象である禽獣ないしその神格化された存在そのものの固有の名称であつたとも考えられない。

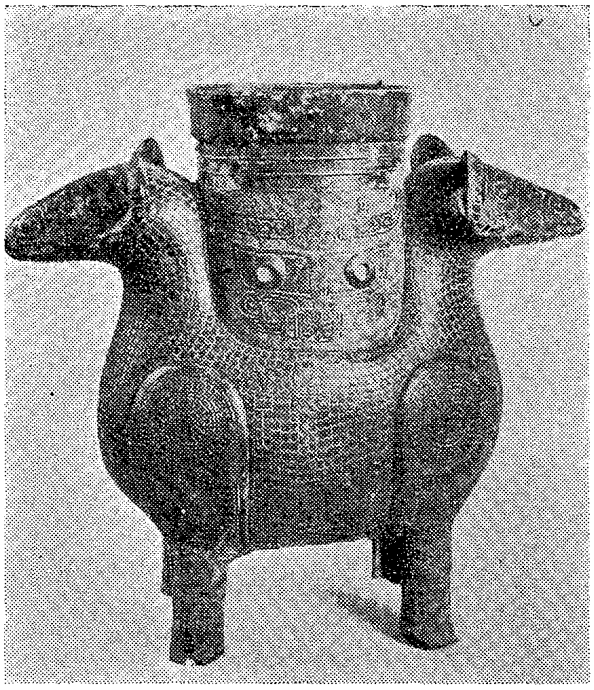
九

ところで、すでにお気付きと思うが、このように并逢・協脅した神獣・霊鳥に関する考古学的諸資料が、先秦において、荊楚の地に顕著にみとめられることは注意に価しよう。そしてこれらが秦漢以降になると、山東や四川ないし雲南などの隣接地域にも散見するようになるが、いわゆる「比翼の鳥」や両頭蛇などをも含め、総じて双頭の神霊妖怪的存在を扱った史書は、ほとんどこれらを東海・南方という方位に関係づけて述べているのは看過し難い点のように思う。たゞし、例外的に『山海経』の中に現われる并逢の類は、南方のほかに西方に棲息するものもあるが、戦国期のシナ人の西と南とに関する知識が往々にして曖昧であること、[44] とくに『山海経』そのものが説く方位には疑義が少なくないことを考慮するならば、『山海経』の記載は必しも私見の障碍とはならないかもしれない。しかも、并逢類の分布にみるこのような傾向は、戦国楚の鎮墓獣に顕著にみられるような吐舌のモティーフのそれにも認めうるのであつて、[45] 并逢は吐舌などと共に、楚を含むいわゆる南蛮種族の土俗・信仰にとくに関係が深かつたのではなかつたかと推定されるものがある。しかし、この推論のためには更に并逢・協脅のもつ宗教的、土俗的意味の考究を併わせ行わなければならないのであるが、こゝでは専らその形態的考察のみに終始し、意味論的考究は、資料の増補を俟つて、つぎの機会にゆづりたい。

たゞ、最後に辞っておきたいのは、今日獲られた資料による限りこのような并逢・協脅の存在が戦国楚の地を中心に顕著にみとめられることは否めないにとしても、その事由をもつて、かゝる文物の発生を直ちにこの地域に結びつけることには躊躇するものがある。

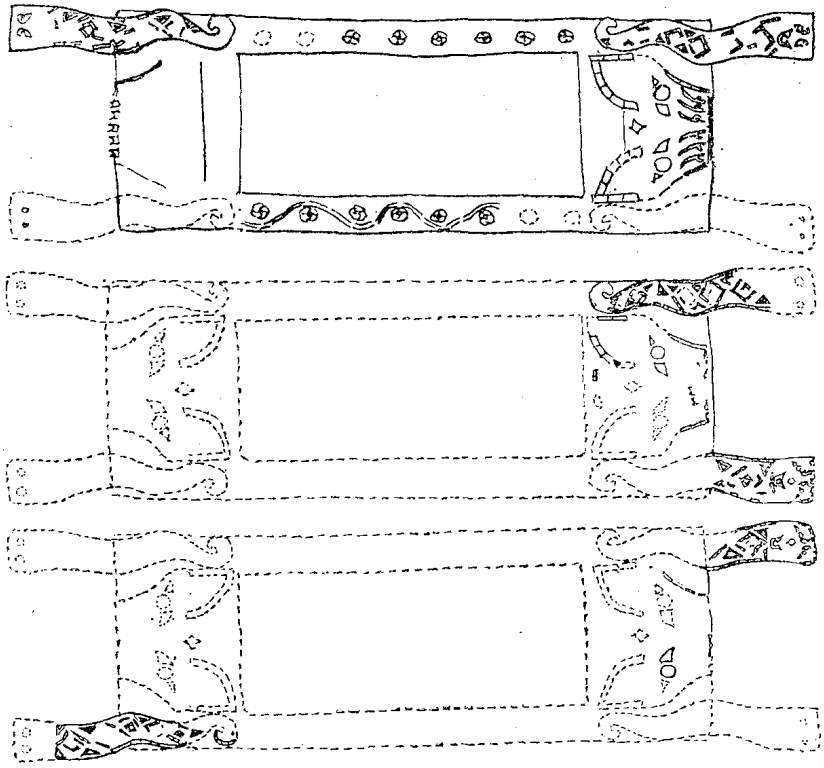
というのは、殷代の遺物中に、禽獣を象つた青銅器にして、それらの肢脚をそのまゝ容器の支脚としたものとは異

り、雙羊尊（第二十六図）・雙鴟鶚卣などのように、容器そのものが、互いに背を向けて立つ二疋の獣類ないし禽鳥から出来ており、それ〴〵の二脚（四足獣にあつては前肢のみ）が、その容器の支脚部となるというプランの青銅容器がみられるからである。殷の美術的モティーフの傾向からして、これをしもシンメトリカルなそれでないと強弁し即断するつもりは毛頭ないけれども、しかしながら、このような奇抜なプランが全く美術的な嗜好からのみ創り出されたものかどうか、果して後世の并逢・協脅像と全く無縁であるかどうかについては、兼ねてから関心のもたれる点であつた。

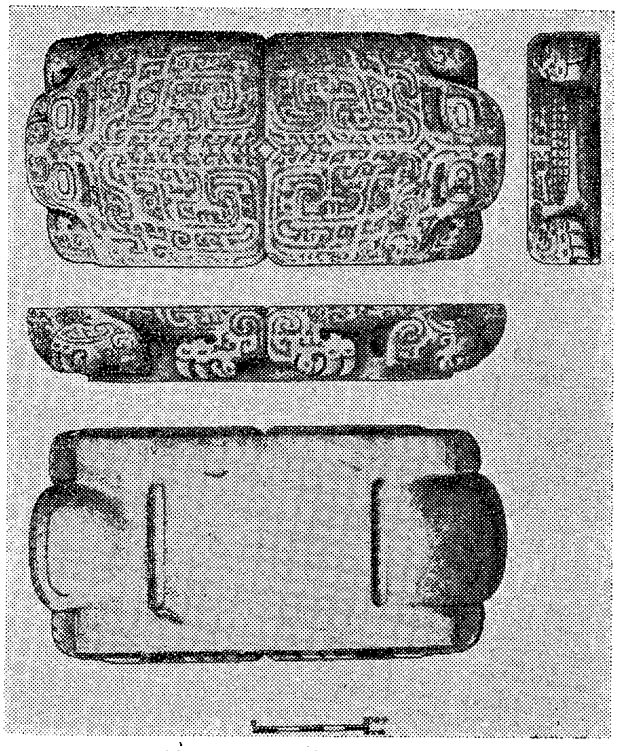


第　26　図

しかも、このような并逢像をあらわすかと疑われるプラン

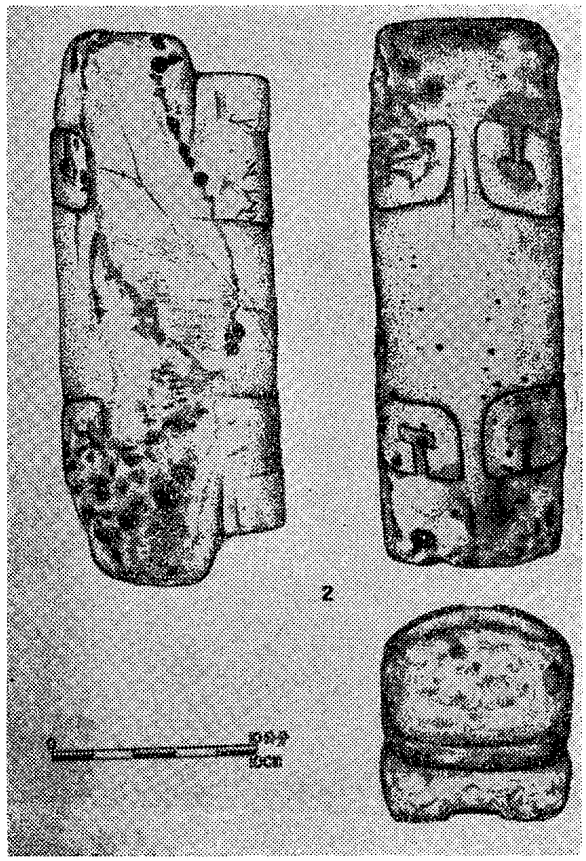


第　27　図



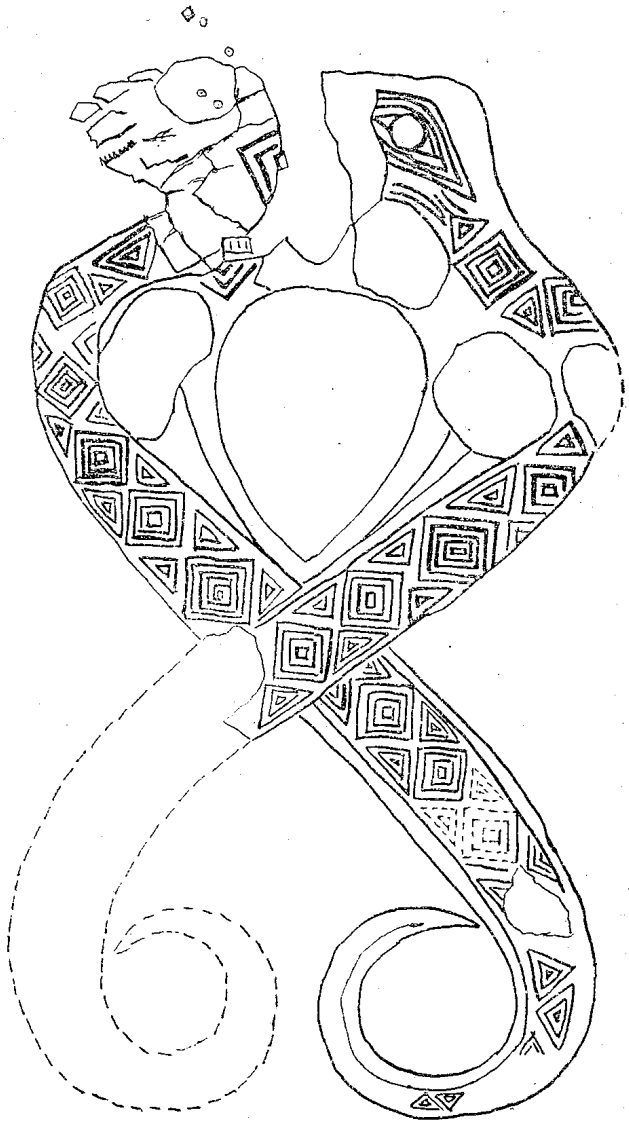
第　28　図

は、ひとり青銅器にのみみられるのではないのである。第二十七図は侯家荘一〇〇一号大墓出土の運搬具と推定される輦台状の復原輪廓図[46]であるが、これもまた相背く二獣を象どり、その前肢は舁棒となつている。しかし、これは上掲の青銅器と軌を一にするものがあり、直ちにこの装飾的プランの背後に形而上学的な意味を想定することに、尚疑義もあろうが、侯家荘の同一墳墓出土のつぎの雙獣彫像・第二十八図・第二十九図[47]にいたつては、并逢像の範疇に入れて検討されて然るべき遺品であるといわなければならない。雙獣の臀部が密着して作られた両者のプランは楚信陽出土の鼓台とされる雙虎像と相似ているが、前者は長さ一米余の大理石製で、その精緻な装飾文などから、実用に供される器物とは考え難く、後者もまた同じような大理石製で、おそらく一種の墓鎮的な呪物であつたのではないかと推測されるのであ



第　29　図

る。寡聞にして他の類例を確認しかねるが、陳夢家氏が、殷代の青銅製の亀や蛙の類にもかような形状の遺物があるといつているのをみれば、この大理石製雙獣像にみる并逢のプランは決して偶然の所産ではなかつたように考えられる。[49] とすれば、つぎの二匹の蛇の相交わる形の木製品・第三十図[50]もまた、同様な考究の対象となりうるものでなかろうか。これも侯家荘一〇〇一号大墓出土の木製品の遺残で、報告者の梁思永氏（高去尋氏補）はその使途を「楽器か？」と疑いつゝ、



第　30　図

不詳なりとするとともに、これを一頭二身蛇図と説いている。[51] この木製品は腐蝕はげしく、全長一米三十六糎余と推定され、とくにその饕餮形の頭部の過半は腐朽して、写真による限り、一頭か二首かを判断する事は甚だ困難なように考えられるものがあり、むしろ漢画象石上などに頻出する伏羲女媧の交尾プランとはなはだしく相似ているのは注目される点であろう。本遺品はたま〳〵殉葬者の頭部上から発見されたといわれているが、多分にマジカルな意味を感じさせると共に、これが特に尾を交えた雙蛇に作られている点は、単なる美術装飾以上の意味がこれにこめられていたのでは

ないかと想像される。そしてもし、これが伏羲女媧に関係ありとすれば、文献上には比較的後出の伏羲女媧にまつわる信仰が、既に殷代に存したことを示唆するものであり、はなはだ興味深いものがあるが、いづれにしても、より客観的な、更に多くの資料の蒐集を俟って再考されるべきものであろう。

本稿は一九六一年十月、神戸医大で行った第十六回日本人類学会、日本民族学協会連合大会席上の研究発表「蒲号攷」（要旨は同大会第十六回紀事一三四―五頁）の一部に加筆したものである。

註

（1）星川清孝「楚辞の研究」三七四―三九六頁（第五章　第一篇「天問」の成立動機とその性質）を参照。

（2）王注の「言天撰十二神鹿一身八足両頭」は「天は十二神を撰え、鹿は一身八足両頭だという」と訓ずべきではないかとも思われる論拠がいくつかあるが、こゝでは慣例に従って読んだ。

（3）蔣驥「山帯閣注楚辞餘論」巻上

（4）王邦采「天問箋略」

（5）朱熹「楚辞集注」

（6）蔣驥「前掲書」

（7）蔣驥「山帯閣注楚辞」巻三

（8）丁晏「天問箋」

（9）郝懿行「山海経箋疏」巻十六

（10）聞一多「伏羲考」（聞一多全集選刊之一「神話与詩」所収）

（11）聞一多「前掲書」二二頁

（12）芮逸夫「苗族的洪水故事与伏羲女媧的伝説」（「国立中央研究院歴史語言研究所「人類学集刊」第一巻第一期所収）

（13）聞一多「前掲書」二二頁

（14）梅原末治「伝長沙出土の木雕怪獣像」（「支那考古学論叢」所収）

(15) 北京歴史博物館刊「楚文物展覧図録」三三頁
(16) 図は角川版「図説世界文化史大系、中国(1)百六十四頁による。
(17) 河南省文化局文物工作隊第一隊「我国考古史上的空前発現信陽長台関発掘一座戦国大墓」（「文物参考資料」一九五七年第九期所収）
(18) 「文物参考資料」一九五七年第九期挿込頁
(19) 聞一多「伏羲考」（前掲書所収）
(20) 四川省博物館研究図録「四川漢代画象磚芸術」七十図
(21) 曽昭燏・蔣宝庚・黎忠義合著「沂南古画像石墓発掘報告」図版二十五
(22) 匡遠瀅「四川宜賓市翠屏村漢墓清理簡報」（「考古通訊」一九五七年三期、二十―二十五頁および図版七の三）
(23) 江蘇省文物管理委員会編著「江蘇徐州漢画象石」八十五図
(24) Chêng Tè Kún; Archaeological Studies in Szechwan, 308 (2, 3, 4)
(25) 四川省博物館文物工作隊「四川彭山後蜀宋琳墓清理簡報」（「考古通訊」一九五八年五期所収）図版五の六、なお、「文物参考資料」一九五八年三期裏表紙裏面の写真を参照のこと。
(26) もつとも郭注は岐頭蛇とも表現しており、頭部がふたまたに分れたY字形を想像させるが、これは『山海経』の并封の二つの頭を左右、前後と異つた表現をしているのと軌を一にするものであろう。
なお、両頭蛇に関しては「嶺表録異」「嶺南異物志」などに散見する。
(27) 山西省文物管理委員会「大原南郊金勝村三号唐墓」（「考古」一九六〇年一期所収）三八頁一の九
(28) 山西省文物管理委員会、山西省考古研究所「山西長治北石槽唐墓」（「考古」一九六二年二期所収、図版七の4　および八の5の左
(29) 湖南省文物管理委員会「長沙黄泥坑戦国・漢・唐宋墓清理簡報」（「考古通訊」一九五六年六期所収）図版十五の一
(30) 湖南省文物管理委員会「長沙黄土嶺唐墓清理記」（「考古通訊」一九五八年三期所収）図版六の一

(31) 陝西省博物館・陝西省文物管理委員会合編「陝北東漢画象石選集」図21
(32) 陳大章、賈峨「復製信陽楚墓出土木漆器模型的体会」(「文物参考資料」一九五八年一期所収)二四―二六頁
(33) 中国科学院考古研究所編「新中国的考古収獲」図版七二の一
(34) 袁荃猷「関于信陽楚墓虎座鼓的復原問題」(「文物」一九六三年二期所収)十―十二頁
(35) 馬承源「漫談戦国青銅器上的画像」(「文物」一九六一年十期所収)二六―三十頁
(36) 河南省文化局文物工作隊「河南省長台関第2号楚墓的発掘」(「考古通訊」一九五八年十一期所収)七九―八十頁 および図四
(37) 梅原末治、水野清一「伝長沙出土の漆画雙鶴雙蛇に就いて」(「美術研究」第六年十二号所収)図五
(38) 梅原末治「湖南省長沙古墳の一括遺物に就いて」(「東洋史研究」第六巻二号所収)
(39) The Bulletin of the Cleveland Museum of Art. Oct. 1938 (但し、梅原博士「前掲書・東洋史研究」六巻二号による)
(40) 一九四〇年三月、米国エール大学で行われた特別展覧会の簡明目録 "An Exhabition of Chinese Antiquities from Ch'ang-sha" に掲載されているといわれるが、未見。
(41) 「後漢書」西南夷伝に「雲南県有神鹿両頭 能食毒草」
「博物志」に「雲南郡出茶首……是両頭鹿名也、獣似鹿両頭……永昌亦有之」
「華陽国志」南中志に「神鹿、一身両頭食毒草」
「酉陽雑俎」巻十六に「耶希、有鹿両頭食毒草」
(42) 「格致鏡原」巻八十九、獣部による。
(43) 貝塚茂樹「神々の誕生―中国史I」三十六頁
(44) 小川琢治「戦国以前の地理上智識の限界」(「支那歴史地理研究」所収)
(45) 伊藤清司「吐舌像に関する若干の考察」昭和三十七年五月十一日・於東京・明治大学・第一回日本民族学協会研究大会

(46) 中央研究院歴史語言研究所編「中国考古報告集之三「侯家荘」第二本　一〇〇一号大墓　上冊　六十五頁

(47) 二十八・九図とも前掲書「侯家荘」下冊、図版七十六の二および八十二・八十三

(48) 陳夢家「殷代銅器」考古学報第七冊二十九頁

(49) 殷後期の青銅鼉鼓上の相脊きて連尾する雙禽？像の装飾もまた同類かもしれない。（平凡社刊「世界考古学大系6東アジアⅡ」九十三頁二五二図）

(50) 前掲書「侯家荘」上冊　插図二十九

(51) 前掲書「侯家荘」上冊五十六頁